

○ 人物表

三木晴子（41） 会社事務員・正社員

飯田久子（73） シルバー派遣

飯田俊伸（50） 久子の息子・バイト

大友玄二（66） タクシー運転手

S E 台所の蛍光灯がつく

晴子（M）「私の名前は三木晴子。アラフオ
ー 独身。父が他界してから実家で母と二人
暮らしだったけど、窮屈になってきて家を
出た」

S E ドンとタケノコを一本置く

晴子「こんな立派タケノコ、一人暮らしの女
がもらってどうすんのよ？ ぜったい全部
食べられないし。しかも泥付きって」

S E ガサガサと新聞紙を開く

晴子「……あ、久子さんなら、どうにかして
くれるかも」

S E 車のエンジンをかける

晴子（M）「久子さんはうちの物流センターで働くシルバー派遣さん。いつも私を気にかけてくれる。でも50歳の息子さんとおっつけようとするのが、ちょっとウザい」

SE 車を止めてエンジンを切る

晴子（M）「ちなみに彼氏いない歴イコール年齢、と言う訳ではない。歴代彼氏は、バンドマンに劇団員、それに作家志望。でも私は、正社員の彼氏が欲しいのだ」

SE ビニール袋とヒールの足音

晴子（M）「だから久子さんの息子さんは絶対に無理。だって50歳でバイトだよ？」

SE ドアをノックする

晴子（少し大きな声）久子さーん。三木で

す。今ちよつといいですか？」

SE ドアをノックする

晴子「あれ？ いないのかな？ ドア、開いてるのに。久子さーん？ 開けますよー」

SE ドアを開ける

晴子「（驚いて）久子さん！」

SE タケノコ、ドサツと床に落ちる

晴子（M）「久子さんが倒れてた」

晴子「やだ！ 久子さん！ ちよつと！」

SE ビニール袋、カサカサ揺れる

晴子「久子さん、起きて！ 久子さん！」

久子「（息も絶え絶えに）あ、晴ちゃん。あのね。俊伸と一緒に行って欲しいのよ」

晴子「え?!」

久子「キラ星メモリーの、ほら、聖地巡礼つてやつ。晴ちゃんも好きでしょ？ アニメ

晴子「好きだけど、それ、今、話さなきゃダメ?!」

SE 救急車のサイレン

晴子（M）「久子さんは逝ってしまった。7

4歳。死因は心筋梗塞」

SE 蛇口をひねり水を汲んで飲む

晴子「いや。ほんととありえないって!」

SE ドンとコップを置く

晴子「いやーやっぱないわー。50歳でバイ

トだから？ 自分の母親が死んでんのに、
なんでもかんでも、久子さんのお姉さんに
やらせる？」

SE ビニール袋を触る

晴子「あーあ。このタケノコ。どうしよ。

(俳句読み) 親孝行、生きてるうちにやっ
とけよ。…久子さん可哀そう(鼻をすす
り)あーもう！」

SE シンクで顔を洗う

SE リンの音

晴子「え？ 何？ 何の音？」

SE リンの音

晴子「なんだか、首と肩がずっしりと」

晴子（M）「え？ ストレートネックの悪化？
台所の隅に置いてある100均で買った立鏡を見ると、私の肩と首に半透明の腕が絡みついてた」

SE コップを落として割れる

晴子「（大声）ぎゃー！！！」

久子「あ、晴ちゃん、あのね。ほら。俊伸と一緒に行ってもらいたいから。聖地巡礼」

晴子「（大声）いやー！！！」

SE 部屋をドタバタ走って止まる

晴子（M）「いや。まさか。そりゃ、人が目の前で死にかけてたんだもん。そりゃ、シヨックで変なの見えちゃうか。あーほら。こっちのドレッサーの方で見ると、目の下のクマが目立って……」

久子「(被せて) あ、だからね、きら星メモ
リーの聖地全部巡るまで、ちよつとここに
いさせてもらおう事にしてて」

晴子「(大声) いやー！」

晴子(M)「半透明の久子さんが、私にしが
みついていた」

SE 遠くで犬が吠える

久子「さっき話したじゃない」

晴子「確かに、話しましたけど」

久子「だからね」

晴子「いや。ってか、なんで死んでるのに、

普通に話せてるの？」

久子「晴ちゃん、アニメ好きだし。俊伸と話
合うかなって、ずっと思ってた」

晴子「いやいや。そうじゃなくて」

久子「ほら私、死んじゃったじゃない？ だ
から、こうやってお話しできるのは晴ちゃ

んだけなのよ」

晴子「ちよっと！ 情報が多すぎる！」

久子「晴ちゃんが鏡を見る時だけ、一緒に映ってお話できるって感じ」

晴子「いや、ファンタジーのルール設定とかいいんで」

久子「聖地限定アクリルフギア、明日までなんでしょ？ 俊伸、欲しいと思うのよ」

晴子「フギアじゃなくて、フィギアだけど。

って？！ きら星メモリーの舞台、苦小牧ですよ？！」

久子「そうなのよ。だからほら。飛行機切符買っておいたから」

晴子「え？！」

久子「絶対に断られると思ったから、今日のお昼に、晴ちゃんの鞆の中、入れておいたのよ。ほら。そこ」

SE バッグのチャックを開ける

久子「虫の知らせだったのかしらねー」

晴子「うそ。私名義の日時指定、航空券」

久子「一番お手頃なのってお願いしたら、それになっちゃって。だから明日、一緒に」

晴子「(被せて) いやいやいやいや！ 明日

って！ 久子さんのお通夜ですよ？！ し

かも苦小牧なんて、日帰りできないし！」

久子「飛行機って面倒なのねー。買う時、窓口の人に変更できません！ って念押しされたわ」

晴子「無理ですって」

久子「でもほら。同じアニメ好きなんだし」

晴子「そんな何でもかんでも同じと思わないで下さい！ いや、それだけじゃなくて、

その次の日は告別式だし。本人不在なんて。俊伸さんは喪主ですよね？」

久子「うーん。そうよねー」

晴子「いや。ほんと。久子さん、ごめんなさいだけど、そういうのはちよっと……」

久子「(被せて) 分かった！ それなら！」

晴子「えええ」

久子「晴ちゃんに、たんす預金。あ・げ・ち
や・う」

晴子「た、たんす？」

久子「俊伸には言っていないへそくりがあるの
よ。ほら、声優さんのコンサート？　行き
たがってたじゃない」

晴子（M）「ダンス預金はともかく、これ、
やらなきやいけないやつだ。成仏させなき
やなんじゃない？」

久子「ね。晴ちゃん、どうかしら？」

晴子「……久子さん。わかりました。チケット
ト、もったいないですもんね。で、俊伸さ
んのチケットはどうしたんですか？」

久子「こっちも虫の知らせだったのかしらね
ー。あの子の分は机の上に置いてあるの」

晴子「え？　じゃあ来ない可能性もあるって
事ですか？」

久子「いや。来るわ。俊伸なら、絶対」

晴子「えええ。謎の自信」

久子「じゃっ、決まり！ ささっ！ 明日は

早いから、早く寝ましょ。おやすみー」

晴子「(FO) おやすみなさい。って！！

え？ これ、一緒に寝るってこと？ いや

起きたら私もあの世とかじゃないですよ

？ ってか寝るって概念、幽霊にある？」

SE 鳥のさえずり

晴子(M)「私は久子さんの一人息子の俊伸

さん、50歳の子供部屋おじさんと一緒に

苦小牧へアニメの聖地巡礼をしに行くこと

に。(久子の声真似) 俊伸、幽霊とか大嫌

いで眠れなくなっちゃうから、私が晴ちゃ

んに取り憑いてることは内緒ね(戻して)

だって。どんだけ甘いんだよ」

SE 飛行機が飛び立つ

晴子（M）「葬儀場をこっそり抜け出した私
と、葬儀場を無理矢理飛び出した俊伸さん
は、機内の席で合流し、喪服のまま、新千
歳空港に到着。急いで苫小牧駅に向かった

SE JR改札の誘導音

晴子（M）「ちよっぴり肌寒いけど、まだち
ようどよさそうな季節の苫小牧。この時期
が正解かも」

俊伸「アクリルフィギアあってよかった！」

晴子「あ、はい」

俊伸「レンナ、残ってたー」

晴子「じゃ、次は聖地巡礼に。えっと、苫小

牧灯台ですかね？」

俊伸「そうですね！ 行きましょう！」

SE タクシーのドアが閉まる

玄二「ご乗車ありがとうございます。この度は、ご愁傷さまでした」

俊伸「え？」

玄二「喪服をお召しになっているので、てっきり法事だったのかと」

俊伸「お心遣い、ありがとうございます」

晴子（M）「お通夜、飛び出してきました」

SE リンの音

玄二「ひいっ！」

晴子「どうしたんですか？」

玄二「お客様、あの。肩が重いとか、連れてきちゃったとか、そういったご経験は？」

俊伸「え？ 何？ 何ですか？！」

晴子（M）「あー見えちゃう系の運転手さんだ。バックミラーで見切れちゃったのね。久子さん、何度も首を横に振ってる」

晴子「え？ 何もないですけど？」

玄二「え、あんなに首振ってるのにな？」

俊伸「変な事、言わないでくださいよ！」

玄二「（落ち込んで）し、失礼しました」

晴子「あの！ 聖地巡礼！ この一帯を周って欲しいんです。これ、チラシ」

玄二「聖地巡礼……。あー。今、流行ってるやつですね。アニメの舞台を巡るって……。って！ 今から？！ こんな夜なのに？」

晴子「はい！ 迅速に！」

玄二「いやー、ちょっと、難しいなー」

晴子「この苦小牧灯台なら行けますよね？」

玄二「いやー、夜の海ってアレですしー」

俊伸「アレって？」

SE チラシを指さす

玄二「これ！ このホッキカレーなら！」

晴子「（小声）こんな時間にカレーって」

玄二「やっぱり、生きる気力というか、精力

が必要だと思っんです。この世の者には」

俊伸「はあ」

玄二「あそこの居酒屋なら21時までやってるはず！　まずは生気を養って、聖地巡礼は明日に！」

SE　タクシーが止まりドアが閉まる

玄二「では、よい聖地巡礼を！」

SE　リンの音

玄二「ひい！」

晴子（M）「すんごい怯えてる。なんか、ちよっと可哀そうだったかも」

SE　活気ある居酒屋

俊伸「いやーしかし。晴子さんもキラメモの

ファンだったとは」

晴子「まあ。野崎先生作品は一通り」

俊伸「キラメモは、レンナがノナミと和解するシーンが一番ですよね」

晴子（M）「んなわけあるかい！ ちょっと

とドラマが始まるのが遅いんじゃないかと悩んだ野崎先生が、自身の作風を変えてまでもつないでしまったと後悔している問題のシーン！」

晴子「あー、そうかなー？ 私、キラメモ自体はガチ勢じゃないんで、ちよつと覚えてないかもー。あ、来ましたよ。ホツキカレー」

SE カレーがテーブルに置かれる

俊伸「（大声）キター！」

晴子（M）「でた。オタク特有の、テンションが上がって声がかくなっちゃうやつ」

俊伸「いただきます」

晴子（M）「俊伸さん、ちゃんと手を合わせてる。こういうの、やるタイプなんだ」

晴子「おいしそうですね」

俊伸「（早口）はい。これは、レンナの好物ですね。ずっと食べたかったー。あの小さなお口に大きなスプーンで頬張る姿が、もう、たまらなくキュートです。口の周りに付いたカレーをノナミが拭いてあげるシーンなんてもう、可愛さが限界を突破し」

晴子「（被せて）あ、ちょっとトイレに」

SE 水道で手を洗って蛇口を締める

晴子「うわっ！」

久子「鏡の中からこんにちはー」

晴子「はーもー。慣れる気がしない」

久子「晴ちゃん、ありがとねー」

晴子「もう、さっさと終わらせますからね」

久子「もう一緒に巡ってくれるだけで充分。

俊伸も嬉しそうで運転手さんも協力的」

晴子（M）「いや。ちょっと厳しいんですけど。テンション高い、アニオタおじさん」

晴子「あ、そうそう。あの運転手さん。見えてますよ。久子さんのこと」

久子「えっ、そうなの？ それじゃ、笑顔振りまいておかなきゃ」

晴子「いやいや。怯えがマックスなんで。やめておいてあげてください」

久子「えー。せっかく見えてるのにー？」

晴子「もう！ そんな、遊んでる暇なんてないですよ！」

久子「あ……なんだか成仏しそう」

晴子「もしかして！ 聖地巡礼が順調にスタートしたから、安心して成仏できる感じがですか？！」

久子「ええいっ！」

晴子「ぐっ、ぐるしい。戻ってこなくていいですって。(むせる) なんか、首に謎の紫色の跡ができてるんですけど」

久子「ごめーん。晴ちゃんにしがみついてないと、上にいっちゃいそうになるのよー」

晴子「聖地巡礼。早く終わらせますから！」

久子「いいのよ。ゆっくりで〜」

晴子「いや！ さっさと終わらせます！」

SE 鳥のさえずり

晴子(M)「翌朝、俊伸さんと私はホテルのロビーで合流。同じ部屋じゃなくてよかったです。流石に空気を読んだよね。久子さん」

SE タクシーのドアが閉まる

玄二「本日はご乗車ありがとうございます。」

行先は、どちらまで？」

晴子（M）「あ。昨日の運転手さん」

晴子「昨日はありがとうございましたー」

俊信「ホッキカレーおいしかったです」

玄二「あー。喪服じゃないから気付かなくて。失礼しましたー」

晴子（M）「運転手さん、ぜんぜんバックミ

ラー見ない」

晴子「じゃ、聖地巡礼、お願いします！」

SE リンの音

玄二「ひい！」

晴子「苦小牧灯台ですかね？ 俊伸さん」

俊伸「そうですね。今度こそ」

晴子「じゃ、お願いしまーす」

玄二「(涙声) はい！ 一刻も早く巡りましよう！」

SE 波音

晴子(M)「聖地、到着。苦小牧灯台。白と赤のシマシマ。ちよっと可愛い。沖には大きなフェリー。船体には太陽のマークがドーンと描かれてる」

晴子「わー！ ここ、野崎先生の筆が止まっちゃって、ネタ探しにロケハンで訪れたところー！」

晴子(M)「しまった。うっかりはしやいでしまった」

SE 汽笛が響き渡る

俊伸「(眩くように) トマコマ」

晴子「え？ トマコマ？」

俊伸「あ、いや。晴子さんも思い入れのある

聖地でよかったです！」

晴子「あーいやー」

俊伸「レンナとノナミが初めて手をつなぐん

ですよ。いやーやっと2人の心がつなが

った瞬間でした」

晴子「あー、そうでしたっけ？」

晴子(M)「ちがーう！ (早口) あのシー

ンは、野崎先生がレンナの想いと自分の想
いを重ねて、自分にもノナミのような存在
がいたら良いのにと、涙を流しながら描い
たシーン！ (戻って) 思い入れの重さが
違う！ 絶対にちゃんと撮ってやる」

俊伸「あっちに見える工業地帯と灯台、そし
て、このアクリルフィギアと一緒に写真に
収めるべきですな」

晴子「うむ。この、コンクリートの縁を降りていけば、きつと一つに収められるはず」

俊伸「(眩く) あ、波が」

晴子「波が来る、ギリギリまで！」

俊伸「あ！」

SE 波しぶき

晴子(M)「俊伸さん、私を波しぶきから庇うのに、腕を強く引いてはくれたけど」

俊伸「間に合いませんでした。すみません」

晴子「こちらこそ調子に乗ってすみません」

晴子(M)「俊伸さん、思ったより力が強くてドキッとした」

SE タクシーの窓をノック

玄二「うわ！ お二人共、びしょ濡れじゃな

いですか！」

俊伸「そうなんですよー。ちょっとしたハブ
ニングがありますね、波が、こうざばー
んと来て、私が庇って腕を引き寄せ……」

晴子「(被せて) あーの！ 温泉とか連れて行
ってもらえます？ ここからだ、洞爺湖
とかが良いすかね？」

SE リンの音

玄二「何言ってるんですか？！ そんな遠くな
んて行けませんよ！ こっから1時間ぐら
いかかる！」

晴子「でも、せっかく来たのに」

玄二「一秒でも早い方がいい！」

晴子「え？ なんで？」

玄二「(被せて) もう！ ぐったりしてるじ
やないですか！ 海水浴びちゃって！」

晴子(M)「あ、塩水で？ 久子さん、除霊

されかけてるってこと？ どおりで肩が少し軽くなった気がした。ってか、なんで運転手さん、久子さん側なのよ？」

俊伸「ぐったりって何ですか？」

玄二「あ、いや。ぐ…ぐ…ぐっしよりですよ。

もう、お二人とも、ぐっしより濡れてて」

晴子「登別温泉なら近いです？」

玄二「(被せて) すぐそこ！ すぐそこに、

銭湯がありますから！」

晴子(M)「荒い運転で到着した銭湯は老舗の雰囲気。壁と暖簾には「苦の湯」と書かれている」

晴子「地元の人向けの銭湯って感じですね」

俊伸「なかなかレアなチヨイスですな。で

は！」

晴子(M)「なんだかんだ一番楽しんでる俊

伸さん。自分の母親が死んだのに、よく楽しめるな」

SE ドライヤーの音

晴子（M）「ふう。やっぱり湯上りはコーヒー牛乳でしょ。（飲んで）くー、うっま！」

久子「はー生き返ったー。鏡の中からこんなにちはー」

晴子「（嘔き出して咳込み） え！ ちょっと！ 生き返るって！ 死んでるし！」

久子「そうだった！」

晴子（M）「壁一面の鏡に久子さん。キラメモ黒Tを着た私の肩に手を置いて余裕の表情。え？ 片手でも平気なの？」

晴子「（小声）私、一人で話していると変だと思われちゃいますよ！」

久子「大丈夫、しばらく誰も来ないから」

晴子「え？ そうなの？」

久子「うん。多分」

晴子「多分って。もう大丈夫なんですか？」

久子「もー大変だったわよー。運転手さんが気付いて急いでくれたから助かったよ」

晴子「（笑いながら）ちよっと、久子さん。

運転手さんに何したんですか？ 急に久子さんサイドになって」

久子「笑顔、振りまいただけよー」

晴子「（笑いながら）それ、呪われると思われてるんじゃないですか？」

久子「もー晴ちゃん。ちよっとこのままいなくなれば良いなって思ってたでしょー？」

晴子「あ、いやー。でも、それで久子さんが成仏できるなら、いっかなーって」

久子「成仏ねー。できるのかしらー？」

晴子「成仏ってそんなに難しいんですか？」

久子「知らないわよ初めてだもの。死ぬの」

晴子と久子「（笑う）」

久子「そうそう。晴ちゃんに話しておこうと

思ってた」

晴子「ん？」

久子「なんで苦小牧だったかってこと」

晴子「それは、キラメモの聖地だからじゃないかな
くて？」

久子「んー。実は苦小牧ってね。一度、来た
ことあるのよ。俊伸が4歳のころかな？

家族3人で来た最初で最後の旅行」

晴子「え。そんなこと、俊伸さん、一言も言
ってなかったですよ」

久子「まあ、覚えてないでしょうね。4歳だ
ったもの」

晴子「そっか。5歳までの記憶って残ってな
いって聞いたことある」

久子「フェリーに乗ってきたのよ。おっきな
フェリー。太陽のマークが書いてあって」

晴子「あ、さつき沖で見たやつ」

久子「変わってないのねー。夕方に大洗を出
発して、苦小牧にお昼に着く便で。もー俊
伸が大はしゃぎでたーいへん。雑魚寝タイ

プの部屋だったから、他の人に迷惑になる
と思って、展望浴室つてのに連れてって」

晴子「フェリーの中に浴室もあるんだ」

久子「最高だったー。浴室の窓から、真っ黒
な海と月しか見えないんだけど。身体一つ
で海の上をプカプカ浮いてるみたいでね」

晴子「ふーん。フェリーも良いですね」

久子「うん。そしたら俊伸、更にはしゃいで
ぜんぜん眠れなくなっちゃって」

晴子「嫌な予感しかない」

久子「で、到着した途端に高熱出して、ホテ
ルですっと寝てただけっていう思い出」

晴子（M）「そういえば、うちのお父さんと

お母さんも、私が4歳で初めて行った温泉
旅行のこと、楽しそうに話してたっけ。

私、全然覚えてないのに」

久子「家に帰ったら、ずーっと残念がってて
ね。トマコマ、トマコマって。トマコマイ

って言えないの。ふふ」

晴子（M）「あ。さっき、眩いてた」

久子「だから俊伸には、ちゃんと苦小牧を旅行して欲しくって」

晴子「そうなんです。……でも、なんで、そういうの、生きてる時にもっと話しておかなかったんですか？」

久子「うーん。なんか、別れた旦那の事、思い出させるのも可哀そうかなって」

晴子「それじゃ、知らない事、いっぱいじゃないですか」

久子「え？」

晴子「せっかくお金かけて旅行に行っても、子供なんて覚えてないのに。その辺の公園とかで充分なのに」

久子「……晴、ちゃん？」

晴子「（涙声）だって……だって、覚えてないもん。楽しい思い出だって、いっぱいあ

ったはずなのに」

久子「どうしたの？」

晴子「（涙声）毎日毎日、小言言われて。大人なんだから。親子なんだから。分かっているはずだって。でもそんなの、やっぱ、

話さなきゃ伝わらないじゃん」

久子「そうね。そうよね」

晴子「（涙声）違うの。違うんです。自分のことなんです」

晴子（M）「親孝行、生きてるうちにやっとけよ。まるで特大ブルーメラン。私こそ、親孝行やらなきゃじゃん」

久子「大丈夫。晴ちゃんのお母さん、まだ元

気じゃない。ね？」

晴子「ううう」

SE テレビの小さな音

晴子（M）「自販機と水色のソファがある
待合室。泣いたこと、俊伸さんに気付かれ
ないか心配だったけど……来ない」

俊伸「お待たせしましたー。いやー、サウナ
があっただんで、ちよつと整えてまして」

晴子（M）「嫌だ。とても嫌。色違いのキラ
メモTシャツ。レンナカラーのブルー。腹
出てるの目立つし。サイズ間違ってるない？

俊伸「ここのサウナ、最高ですよ！ 広くつ
て。サウナーの聖地かな？ こういうところ、
続いて欲しいよなー」

晴子「あの！」

俊伸「はい？」

晴子「ちよつとお話が！」

俊伸「はい。なんででしょう？」

晴子「どうして、久子さんに冷たかったんで
すか？」

俊伸「い、いきなり、なんですか？」

晴子「（口を尖らせて）いや。なんとなく」

俊伸「親子なんて、そんなもんじゃないかな

ー？」

晴子「違う！」

俊伸「きゅ、急にどうしたんですか？」

晴子「久子さん、いつも大変そうでした。味の濃い食事ばかり欲しがるから、自分は胃がもたれちゃったって。でも薄味にすると俊伸さんが不機嫌になっちゃうって」

俊伸「そんなことまで、晴子さんに？」

晴子「今回の旅行だって、もしかしたら自分が体調を崩しそうな分かかってて、準備してたのかもしれない」

俊伸「そうかも、しれない」

晴子「あ、後のは、私の憶測ですけど」

俊伸「（息を吐いて）お袋は、俺が大好きだった

父親を捨てたんです」

晴子「……え？」

俊伸「俺を連れて他に男のところに行つて。」

だから俺は父親と引き裂かれたような気持ちになつてて」

晴子「そんな」

俊伸「でも、その男にも捨てられて。もう、

なんだか惨めで」

晴子「惨めだなんて」

俊伸「恨んだらいいのか。憐れんだらいいの

か、分かんなくなつた」

晴子「分かんないって、そんな」

俊伸「もう。拗らせちゃつたんだなって。お

互いに。だから……」

晴子「(被せて) 今からでも！ 遅くない！」

俊伸「へ？」

晴子「あ、いや。ちゃんと、自分の気持ち、

伝えたほうがいいと思います！」

俊伸「こ、ここで？」

晴子「はい！」

俊伸「え、でも、どうやって？」

晴子「あ、ほら、これに！」

SE アクリルキーホルダーを外す

晴子（M）「俊伸さんのバッグについている、
レンナのアクリルキーホルダーを外して、
俊伸の顔の前に突き出した」

俊伸「はあ」

晴子「レンナだって、ノナミに、ちゃんと謝
ってたじゃないですか！」

俊伸「ま、まあ」

晴子「では、どうぞ」

俊伸「（咳払い）えー。お袋。この度は、急な
ご逝去となりました、その節は大変……」

晴子「（被せて）ちがーう！」

俊伸「えーっと、お袋、ごめん！」

晴子「そう！ そっち！」

俊伸「いつも不機嫌で、悪かった。でも、ど
うしたらいいか分かんなくって」

晴子「うんうん」

俊伸「そのうち介護も必要になるだろうなっ

て思って、わざとバイトにしてたんだ」

晴子「え？ そうなの？」

俊伸「あ、いや、それは今、思いついたこと
なんだけど」

晴子（M）「やっぱ、ないわー。50歳でバイ
ト、ないわー」

俊伸「お袋最近、体調悪そうだったから、キ
ラメモ聖地限定フィギア買いに行くの、諦
めてたんだよね」

晴子「……そうだったんだ」

俊伸「だから、ほんと、チケットありがとう
な。お袋」

晴子「ちがーう！ そっちじゃなーい！」

SE タクシーのドアが閉まる

SE 静かなリンの音

玄二「行き先は……え！　薄くなってる！」

晴子「え？！　何？　久子さん？！」

晴子（M）「バックミラー越しに久子さんを見ようとしたけど、よく見えない」

晴子「え、やだ！　ダメだよ、久子さん！　あ

んな俊伸さんの言葉で成仏しちゃ！　運転手さん！　どうしたらいいんですか？！」

俊伸「え？　なに？　何が起きてるの？」

玄二「どうすればって言われても……え？！　やっぱり見えてるの？！」

晴子「もう、そんなの、どうでもいいんで！

どうすればいいのか、教えて下さい！」

玄二「そんな事、言われても」

晴子「しっかりして！　久子さん！　ちゃん

としがみついてて！　まだ終わってない！」

晴子（M）「私は自分の首を強く絞めた」

俊伸「ちょっと！　どうしちゃったんです

か?! 晴子さん!」

玄二「ダメだ! 早まるな!」

晴子「(息も絶え絶えに)もう! 早く! 樽前山神社に行ってください!」

SE タクシー、急ブレーキ

玄二「ご武運を! ん? あれ? 肩が?」

晴子(M)「目の前に広がる樽前山神社は、まるで私達を待っていたかのよう。太陽の光が降り注いで神々しい」

俊伸「いやー。たどり着きましたねー。で、

あの。さっきのお袋がどうのってのは?」

晴子「(スルーして)あー、やっと最後の聖地ですね。ここって何のシーンでしたっけ?」

俊伸「(咳払いして)(早口)レンナとノナミでお祭りにきたけど、レンナがはぐれて迷子になって。でも、自分達の力でなんとか

落ち合うことができ、無事に帰宅。いやー
あの時は、ほんとハラハラしました」

晴子「(大声) ちがーう！ あのシーンは！

(早口) レンナが迷子になって自宅に戻ってこないことを心配した母親が、混雑した境内を必死に探していたのに、自分じゃなくてノナミの方に駆け寄るレンナを見て、あーもう、自分は要らないのかなって母親がセンチメンタルになるっていう、野崎先生ご自身の思い出を重ねたシーンです！」

俊伸「なるほど」

晴子「(小声) しまった。うっかり、オタク特有のテンションマックス大声アンド早口になっちゃった」

俊伸「ま、そういう解釈もありますよね。でも、視聴者が観たいのは、子供たちの成長、努力だと思っんで、作者の想いはサブストリーというか」

晴子「(低い声) そういう、母の想いとかスルーしてメインキャラだけみるの、よくない

と思います」

俊伸「え？」

晴子「だから、サブキャラの想いとか、そういうのもちゃんと理解した上で、作品って観るべきだと思うんです！」

俊伸「え、いや、それは、人それぞれ楽しみ方があって、そこは、そんなに……」

晴子「（被せて）もう！ 言いますけど！」

俊伸「（困って）今度は何ですか？」

晴子「あたし、ああいうの大嫌い！」

俊伸「へ？ なに？ 何が嫌なの？」

晴子「長い休みだけ帰ってくるような息子が、スーパーでなかなか袋詰めが終わらない母親に（声色変えて）あーもー遅せーよ！（戻して）とか言ってるやつ。じゃーお前がやれよ！ って」

俊伸「ああ」

晴子「それで母親の方は、なんか困ったようないい表情で、はいはい、って聞いてて」

俊伸「うれしいんでしょうね。久しぶりに会えて」

晴子「……母親って、何されても息子が可愛いんですよ」

俊伸「ま、まあ。確かに」

晴子「だから！ 久子さん、ずっと私に取り憑いてるんです！」

俊伸「え！ こわい！」

晴子「久子さん、言っていました。苦小牧にフエリーで来たことあって。それは、3人の最初で最後の旅行だったらしいんですけど」

俊伸「え？ こ、ここに、おふくろがいるってことですか？！」

晴子「（スルーして）俊伸さんが高熱出して、ホテルから動けなくて。で、キラメモ聖地が苦小牧だって気づいたから、俊伸さんにちゃんと旅行してもらいたいわって！（小声）いや、なんであたしが一緒に行くのが前提だったのかったのはアレだけど」

俊伸「……トマコマ」

晴子「それ！ え、覚えてんの？」

俊伸「あ、いや、ぼんやりと」

晴子「んーもー！ ちゃんと感謝してあげて

ください！」

俊伸「そうですね。ありがとうございます。

晴子さん」

晴子「いや、あたしじゃなくて久子さんに！

…え！ なんか、肩が、ものすごく軽い！」

SE バックのチャックを開ける

晴子「このファンデのミラーの中にきつと：

…、映ってなーい！」

俊伸「晴子さん、ありがとう。もう、充分」

晴子「（涙声）そんなー」

俊伸「俺らの親子ために本当にありがとう」

晴子「（泣きながら）久子さーん」

SE 飛行機が飛び立つ音

晴子（M）「長いような短いような、1泊二日の聖地巡礼。苦小牧旅行。戻ってすぐに諸々の手続きを全て一人でやり遂げた俊伸さんは、ちよっぴり顔つきが変わったような気がした」

SE 台所の蛍光灯がつく

晴子「で、このタケノコ、どうしたらいいんですか？」

SE リンの音

久子「時間経ってると、えぐみが出てるから、下の部分はざっくり切っちゃって」

晴子（M）「そう。久子さんは、まだ成仏できないらしい」

久子「鍋に水をたっぷり入れて、お米も一緒

にして湯がいくの。米ぬかなんて面倒な
んだから、いいのよ。米、入れときゃ」

晴子（M）「幽霊だから神社に入れなかったん
だって。だから運転手さんの肩を借りて、
鳥居の外でまっただって。そんな設定、知
らんがな！」

SE タケノコを水で洗う

久子「お母さん、喜ぶわよ。きっと」

晴子「あーなんか緊張してきた」

久子「おかしな子。自分の親なのに」

晴子「ねー。なんでだろー」

久子「ふふふ。あれ？ タッパー、3つ？」

晴子「あー。絶対に食べきれないんで、俊伸
さんにもあげます」

久子「え！ あらやだ！ まあ！」

晴子「あー、違いますよ」

久子「えー、あらー、成仏しそう！」

晴子「あーダメダメ！ 薄くなってる！ 成
仏するところじゃないですって！」

久子「心根の優しい子なのよー。だから、絶
対、お似合いだと思おうのよねー」

晴子「いやいや、違いますって」

久子「5年だけ、正社員だったんだから、5
0からでもきつとなれるわよ」

晴子「そういうのも、また、違くって」

久子「大丈夫、大丈夫。俊伸の顔つき、変わ
ってきたって思ったんだし」

晴子「へ？」

久子「そりゃー取り憑いてるんだもん。考え
てることだって、聞こえちゃうわよ」

晴子「（大声）えー！」

久子「思ったより力強くてドキッとしてたし」

晴子「（大声）いやー！」

久子「いい感じだと思おうのー」

晴子「（大声）もー絶対に！ 無理！」

SE 蛍光灯のジジツという音 了